家庭における食の多様化と台所文化の再生

―ジェンダー論的農村社会学の視点から―

吉備国際大学　靍　理恵子

１　本報告の目的および方法

本報告の目的は、高度経済成長以降の日本の家庭における食の多様化と台所文化の変化（生成・継承や消滅・断絶など）について、フィールドワークに基づきジェンダー論を意識した農村社会学の視点から考察することを通して、台所文化の現状と課題、今後の展望を明らかにすることにある。

２　家庭における食の多様化

家庭における食は、戦後の高度経済成長期以降、大きく変化してきたとされる。本報告では、それを多様化として、担い手と中身の２つに分けて捉える。担い手の多様化は、性別役割分業意識の希薄化に伴う変化で、まず女性だけでなく男性へ、さらに高齢者、若者、子どもへも広がりつつある。家族内の担い手が増えることで母（妻）の負担が軽減されただけでなく、個々人の生活能力も高め、進学・就職・離死別などによるライフコース上の変化への対応能力も向上している。

一方で、既婚女性への圧力が低下する中、誰も責任を負わない「総無責任体制」とも言うべき状況が生まれた家庭もある。育児において「お母さんだって人間、いつもいいお母さんではいられない」と半ば児童虐待を肯定するかのような露悪的言説の広がりが憂慮されている。それと類似の構造である。つまり、よりマシな選択肢を増やす努力や知識が少ないための開き直りに近いものである。そのしわ寄せは、ダイレクトに子どもにきている。

食の中身の多様化と曖昧化は、担い手の多様化と密接に関連している。基本的食習慣の獲得・それを支える知識や技術の獲得が、家庭の中で躾として行われてきた。それが大きく揺らいでいる。

３　台所文化の変化と問題点

台所文化とは、家庭の中で受け継がれていく食に関わる価値・知識・技術・行動様式の総体としておく。台所文化は高度経済成長期以降、大きく変化している。性別役割分業意識の希薄化、多国籍化、外部化、簡便化等は、プラスとマイナス、両方の効果をもたらした。マイナス面に着目すると、具体的な問題点は多数あるが、それらに共通していることは、食は心身を作る、という実感がなくなったことである。ここではそれを食に関する身体性の喪失と呼ぶことにする。

それぞれに忙しい家族。買い物、調理、片づけ、家の手伝い、家族が共に過ごす時間の減少。教える、経験する機会の極端な減少。こうした中、台所文化の継承が危うくなった家庭がある。

４　農業体験による食・農・からだのつながり

身体性の喪失や台所文化の危機に対し、農と食がつながる体験をすることで、体験者たちが身体性を取り戻すことが見られている。家庭における食の担い手が曖昧化、多様化する中、食の中身も曖昧化、多様化している。ジェンダーを超えた動きの一方で、家庭の食に家族員の誰も責任を持たない、台所文化がない家庭が生まれ、そのしわ寄せは子どもにきている。こうした中、農とつながることで身体性を取り戻す試みが広がりつつある。